

2021年2月21日(日)／説教者：國分美生

説教：「対話する神」

聖書：創世記18:16～33

本日の箇所は非常に興味深いです。神はそれまでもアブラハムと会話してきましたが、それは語る神と、それを受けるアブラハムという形です。この場面では、アブラハムは神を畏れ敬いながらも、ひるまず問いを投げ続け、神もその問いに対し忍耐強く答え続けます。22節で「アブラハムはなお、主の御前にいた」と、アブラハム目線から書かれていますが、違う角度から眺めると、神がアブラハムの元にとどまったといえます。この後に続く記述を思えば、神はアブラハムと対話をするために残った、と考えられます。神はソドムに裁きを下すことをアブラハムに隠しませんでした。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい」という言葉が印象的です。神はソドムの非道なふるまいによって苦しみ、助けを求めている人々の叫び声を聞かれたのでした。ここから神とアブラハムの対話がはじまります。正しい者と悪い者とをひっくるめて滅ぼしてしまうような行為は神の神聖さにとってふさわしくない、とアブラハムは主張します。神の憐れみ深い正義のもとでは罪のない人々が他者を救う力を持ち、罪ゆえの破滅を克服する力を持っている可能性は考慮されないのだろうか…そのような神学的対話から、神の真理を心底求める人間に、向き合ってください神の姿が見えます。聖書が書かれた時代の社会的価値観の限界や、新約におけるイエスの言動を鑑みれば、神にとって対話の相手が男かどうか、権威を持つかどうかは、問題ではなからうと私たちは理解します。そこにはご自分の被造物である一人の人間に、憐れみ深く、真摯に対話してくださる主なる神の姿があります。

わたしたちは自分が直面している現実社会と聖書を切り離すことなく、そこから福音を受け取り、励まされ、立ち上がる力をいただきます。今、同じように聖書によって立ち、自分たちの過酷な現実の中で、十字架を掲げ立ち続ける信仰の仲間たちがミャンマーにいます。再び、ミャンマー国軍による抑圧的な軍事政権が行われようとする中、ミャンマー・バプテスト連盟は聖書に基づき、平和のために行動する旨の宣言文を出しました。

私たちの主なる神は私たちの思いを無視して一方的に上から命令して押さえつける神ではありません。対話してくださる神に感謝しつつ、その感謝を具体的に表す歩みを、私たちもさせていただきたいと強く願います。(國分美生)